

長野県立歴史館たより

2006年 夏号 Vol.47

將軍官 旨所

出展 松竹

今般 ^{王政即一新} 以 浸 身 是 近 天 飲 皇

統 之 來 也 活 有 之 未 比 及

賦 流 之 所 飲 等 司 中 流 到 苛

念入取調可成力了

能 之 勢 政 之 昔 也 然 身 忠 寧

之 報 也 取 守 忠 心 兼 之 疾 病 亦 救 之 道 也 取 之 皇 之 三 身 元 無 事 也 之 亦 負 氏 大 災 之 罹 罹 困 難

之 者 也 了 夫 了 以 取 取 之 之 以 取 和 也 可 也 之 之 也 同 也 之 之 也 中 論

和 祝 之 也 亦 減 收

所 身 去 年 未 知 之 也 也

夏季企画展

幕末の信州

— 時代を駆けた草莽たち —

■七月二三日(土)〜八月二七日(日)

嘉永六年(一八五三)、ペリー艦隊の来航は、

江戸幕府支配体制と海防に対する危機感をより一層深めました。危機の意識は、「尊王攘夷」を掲げて現状打破を図ろうとする人びとを生み出しました。藩を背景としない浪人や農民・商人の活動家は、「草莽」と呼ばれました。

信州にも、激動の時代に身を投じた草莽たちがいたことを知っていますか。本企画展で彼らの足跡とその想いを展示します。

世界史の中の黒船来航

一八五〇年代は資本主義の確立期です。外圧による開国は日本にとっては試練でしたが、世界史的には必然でした。日本の歴史は近代の夜明けに向かって大きく動き出します。

草莽の勃興とその活動

幕府の専断政治回復をめざす井伊大老政権に対し、反井伊派は朝廷や公卿への働きかけを活発化し、次第に京都が政治の中心となっていきました。松本出身の近藤・山本兄弟も京都で活動しましたが、



山本貞一郎 (個人蔵)

安政の大獄で処刑されました。

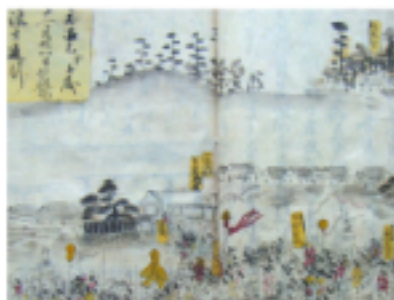
平田国学の広がり

尊王を説く平田篤胤の国学は、しだいに時代変革を告げる思想となっていき、信州は全国一の門人を数えました。

平田国学門人は、文久三年(一八六三)、将軍家茂上洛に合せて、足利將軍の木像の首を三条河原に晒し、尊王の気概を示しました。このため千曲市出身の高松平十郎は幕府方の捕りに手こたえて自刃し、佐久市出身の角田忠行はかろうじて京を脱出しました。

水戸天狗党の通行

元治元年(一八六四)一月、京都をめざす水戸藩の尊王攘夷派(天狗党)は信州に侵入しました。しり込みする諸藩の中で、諏訪・松本藩連合軍は和田峠下にこれを迎え撃ちました。伊那谷では平田国学門人が天狗党と交渉し、飯田城下を迂回させて戦禍なく通過させました。



天狗党 伊那谷通行の図「今様奇談」(個人蔵)

赤報隊と年貢半減令

慶応四年(一八六八)一月から、新政府と旧幕府勢力との約一年半におよぶ戊辰戦争が始まりました。前年後半からの政争を内乱に持ち込むきっかけをつくったのは相楽総三を中心とする草莽たちでした。彼らは鳥羽・伏見の戦いの直後、滋賀県で「赤報隊」を結成し、新政府から「官軍」の認可と「年貢半減令」布告の許可を得て、中山道を東に向かいました。隊には、齊藤養斎・丸山徳五郎など信州人が幹部に名を連ねています。

しかし、まもなく新政府は草莽を切捨てる策に転じ、帰京命令を下しました。が、相楽らは碓氷峠占拠の初志を貫くべく信濃に進みました。「官軍先鋒嚮導隊」と名を変えた彼らは、伊



分遣隊派遣を決定した領法寺 (高森町)

那路を進み、下諏訪宿に本陣を据え和田峠を押さえ、望月出身の桜井常五郎らを分遣隊として佐久・小県方面に派遣しました。

追分戦争と隊の壊滅

新政府は、財政難打開のネックともなっていた「年貢半減令」の処理も含めて、相楽隊を「偽官軍」と断じ、二月信州諸藩に討伐を命じました。分遣隊は追分宿で小諸藩に襲われ壊滅し、下諏訪宿の隊員も捉えられ、「悪徒・賊徒」の汚名を着せられて、断罪されました。

文献史料をよむ

行政文書のしめす佐良志奈神社蔵県宝細形銅剣の出土地

佐良志奈神社蔵の県宝細形銅剣

佐良志奈神社蔵の細形銅剣は一九七四年、長野県宝に指定されました。「長野県指定文化財調査報告書第九集」(一九七八)には、「江戸時代の発見で、出土地点は埴科郡戸倉町若宮地籍とされている(略)。現存長さ一三・五センチメートルの小形完形品で、細形銅剣として取り扱われている(略)。破損の結果、身の上半部を利用して、その下端を加工研磨して茎部を作ったらしい(略)。細形銅剣は、元来北九州の前期末、ないし中期の弥生時代遺跡に出土し、その分布は中国・四国・近畿西部にまで急激に数を減じつつ及んでいる。本品はいわば、その文化圏の東に近く存在するもので、その点、幾つかの問題をはらんでいる(後略)」と記されています。

森本六爾による出土地の推定

森本六爾は一九二九年『考古学雑誌』に「信濃若宮銅剣」を発表し、明治二八年(一八九五)五月の佐良志奈神社の「由緒書類」(以下①)に次の記述がみられることを紹介しました。

一 古銅矢鏃 形 竹葉六穿二

別紙如図

更級郡更級村大字若宮字箭塚所出於國中も文化年中本村農水并孫左衛門得以テ納本社

発見者とされる水井は明治一六年(一八八三)に六一歳でなくなっており、文化年間(一八〇四〜一八一七)に発掘することはあり得ないことは森本も指摘しており、子孫が後年奉納したと推測しました。この報告以後、銅剣の出土地は「若宮字箭塚」と記述されるようになり、当館でもそう表記してきました。



佐良志奈神社蔵の細形銅剣(複製)

前山出土を示す行政文書

①と同じ内容のものは当館蔵の行政文書、明治二八年『更級郡神社取調帳』にも含まれますが、さらに古い明治一二年の『信濃国神社寶物古器物古文書目録帳三』(以下②)に次の記述が確認されました。

佐良志奈神社寶物古器物目録

略録起

巻巻

(中略)

古銅鐵 明治十一年四月本社近境字前山於豊城直友私有地出土之本村農宮崎亀四郎奉納 (中略)

長野縣管下信濃国更級郡若宮村

佐良志奈神社祠掌少講義 豊城直友(後略)

この文書には、「字前山」から出土したと記されています。はたして、箭塚と前山のどちらから出土したのでしょうか。

豊城直友と水井は②が提出された以前から面識があることは、明治九年と同一一年五月の同神社提出書類の中に、祠掌豊城直友と関係、副戸長としての水井孫左衛門の名が記されることから確実です。したがって、②が作成された段階で水井が奉納していたなら、水井の名が記されてしかるべきですが、発見者として宮崎亀四郎の名が記されています。亀四郎は安政六年(一八五九)五月に若宮で生まれ、俳句では不老軒、華道では涼雲齋四世・里雲齋を名乗っている人物です。水井の奉納を記す①は、水井も直友(明治一四年没)も亡くなってしまった後のもので、後年どうして水井が奉納したと記されたか不明です。同社には「古代矢鏃」も二点あり、その奉納と取り違えられたものかもしれません。

発見地が前山とすると何が変わるのでしょうか。これまで、この細形銅剣は弥生時代後期のものとされてきました。それは箭塚の付近に同時代の土器片が散布していたり、青銅器の分布の中心から離れた地で発見されたことなどによります。ところが、豊城直友の旧所有地に当たる前山地籍には八王子山A遺跡があり、弥生時代中期初頭の土器群が発掘されています。細形銅剣の所屬時期についても再検討が必要になってくると思われます。

常設展示室から

源始

縄文土器と弥生土器の中間的な土器が展示されています。小諸市氷遺跡の縄文時代晩期の土器です。縄文時代中期のような、派手な装飾はありませんが、浮線文と呼ばれる線により、直線や菱形が規則的に描かれています。土器の表面はきれいに磨かれていて、落ち着きと洗練された雰囲気が見られます。



氷遺跡出土の浅鉢形土器

一九九四年の上信越自動車道建設に伴う発掘調査によって、千曲市の千曲川自然堤防上に位置する屋代遺跡群から一三〇点もの木簡が発見されました。この屋代木簡は、七世紀後半か

古代・中世

ら八世紀前半の律令国家成立期の地方における出土文字資料として全国的にも貴重で、二〇〇四年に県宝に指定されました。今回は、「信濃」という文字が用いられている県内最古の史料である木簡など三点が、新たに模造されて公開されています。



屋代遺跡群出土の木製祭祀具

このほかに同じ千曲川旧流路から出土した斎串・人形・馬形・蛇形などの大量の木製祭祀具も展示しています。旧流路の周辺では祭祀がおこなわれていたことがわかります。

近世

小テーマ「庶民の旅」では、旅の装束を展示します。近世絵画をみるとさまざまな旅姿の

人が描かれています。その中で、一般的な男性の装束としては、笠に小袖・股引を着用し、手甲・脚絆を付け草鞋をはいています。また、合羽をはおる人もいます。

歌川（安藤）広重作の浮世絵「木曾街道六十九次」の内「軽井沢」も展示します。当時の旅人の風俗がうかがえる作品で、煙管・煙草入れ・小田原提灯なども観察できます。その他、「善光寺への旅」パネルや善光寺絵図もご覧下さい。

近現代

展示室では百年前の信州ブランドとなった松山鞆を展示しています。松山鞆は一九〇一年（明治三四）、松山原造（小県郡長和町出身）によって考案され、農具としては初めての特許を得ています。

農業の機械化が進むまでの約七〇年、日本各地で松山鞆が使われ、現在でも改良されたものが東南アジアなどに輸出されています。



松山鞆

歴史館さんぽ

板碑と卒塔婆

常設展示室のほぼ中央に、今から約八〇〇年前の鎌倉時代の善光寺門前を復原した空間がありま
す。この空間の中で意外と見過ご
されがちな板碑と卒塔婆を今回
ご紹介します。善光寺門前へは瀬
花川にかかる木橋を渡って入り
ますが、その木橋の左手の薄暗が
りの中にそれらはたたずんでいま
す。

板碑は石板の供養塔の一種で、
鎌倉時代から室町時代にかけて、
おもに関東周辺で盛んに造られま
した。歴史館の板碑（高さ約一・六
メートル×幅約六四センチ）には仏の姿の
かわりに阿彌陀三尊を象徴する梵
字（古代インドのサンスクリット
文字）の種字が刻まれています。



板碑の左隣には大小二本の卒塔

婆があります（大は高さ約四・五
メートル、小は高さ約三・五メートル）。卒塔
婆はもともと梵語で釈迦や仏弟
子の舍利（遺骨）・遺髪などを納
めた墓に建てられた塔（ストゥー
パ）を意味し、中国で「卒塔婆」
と表記され、日本に伝わったも
のです。日本では一〇世紀頃から
お墓などに卒塔婆を立てる風習が
さかんになったといわれており、
「一遍聖絵」など中世の絵巻にも
卒塔婆が林立する空間が描かれて
います。

瀬花川の河原や善光寺のような
寺院の周辺は墓地や供養の空間で
もあり、亡くなった人たちの成仏
を願って板碑や卒塔婆が建てられ
たと考えられます。

こうした供養塔や卒塔婆は現在
の墓石につながるもの
ですが、青森県の津軽
地方などでは、現在で
もまさに中世のものと
全く同じような立派な
卒塔婆が墓地に林立し
ている風景を見ることが
できます。

これで なつとく！

レファレンスから

質問一「北信五岳」はどの山やま
で、いつ頃選ばれたのですか。

回答 戸隠山、飯綱山、黒姫山、
妙高山、斑尾山の五山です。地域
によっては斑尾山の代わりに高社
山を入れることもあるようです。
いずれも千曲川東側の地域からよ
く眺められますが、「北信」とい
う言い方は明治以降ですから、意
外と新しい呼び名です。しかし大
正時代半ば頃の須坂中学（現須坂
高校）校歌に既に採用されている
ので、その頃には定着しはじめて
いたようです。また新潟県の妙高
山が含まれることから、地元以外
の人による命名の可能性がありま
す。山ノ内町上林温泉にきた歌人
（斎藤茂吉か）が名付けたとい
話もあるようです。

質問二 中馬や木曾馬の取引につ
いて調査しているので、馬喰の実
態や取引頭数などのデータがあっ
たら教えてほしい。

回答 歴史館のデータベースか
ら、近世運輸「中馬」関係の論文
のほか、所蔵図書資料を検索しま
した。その結果、「中馬の習俗

無形の民俗文化財記録 長野県」
（文化庁文化財保護部編）並び
に「高冷地の地理学」（市川健夫
著）などがありました。特に後者
には、「長野県における畜産業と
その発達 木曾馬の生産構造」と
いう項目があり、市町村別のデー
タが載っていました。それによる
と江戸中期で三〇〇〜三五〇頭、
幕末でその倍以上、昭和初期で約
一〇〇〇頭の木曾馬生産（取引）
があり、飼育頭数はさらに多かつ
たようです。

歴史館では、信州の歴史に関す
る皆様からの質問を、いつでもう
けたまわっております。お気軽に
お問い合わせください。



歴史館では、信州の歴史に関す
る皆様からの質問を、いつでもう
けたまわっております。お気軽に
お問い合わせください。

考古資料をよび

長野県宝に指定された下茂内遺跡の石器

◆石槍の製作遺跡

佐久市香坂の下茂内遺跡から出土した先土器時代（旧石器時代）の石器群が、本年四月長野県宝に指定されました。長野県内で先土器時代の石器が重要な考古資料として県宝以上で指定されるのは、重要文化財の南箕輪村神子柴遺跡出土石器と県宝の上田市唐沢B遺跡について三番目となります。

下茂内遺跡は一九八八年度から翌年度にかけて、上信越自動車道建設に伴って長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査されました。現在は群馬県境八風山トネルの長野県側の出入口あたりが下茂内遺跡です。標高九〇〇メートルを測り、県境を源とする香坂川の河岸段丘に形成された遺跡です。下茂内遺跡からは三〇〇点を越える製作途中の石槍と一〇万点におよぶ剥片類が出土したことから、先土器時代の石槍の製作跡と考えられました。なぜ、このような山間部に石槍製作遺跡が作られたのでしょうか。

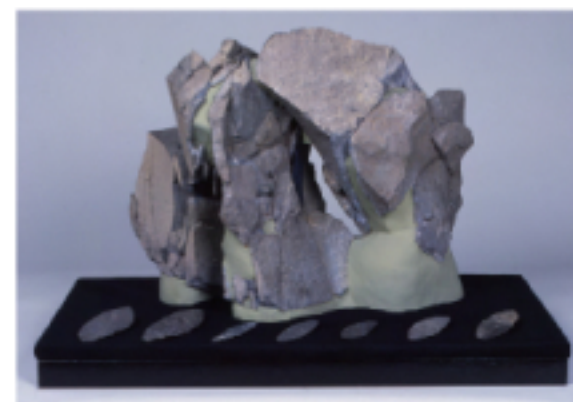
◆安山岩の原産地遺跡

佐久市東部の群馬県境には荒船山、八風山といった無斑晶質安山岩を産出する山がありま

す。巨大で黒色緻密な安山岩は、石器時代人にとって大事な石器の素材でした。

信州は、長和町和田峠・星養峠、下諏訪町星ヶ塔、茅野市冷山など黒曜石という石器のすぐれた原材料を産するところです。黒曜石の使用がはじまるのは三万年前頃で、薄いかけらを剥

がし、多くは、五センチ前後の石のナイフに用いられました。二万年



下茂内遺跡の巨大な接合資料(奥)と石槍(手前)

前頃黒曜石の産地では盛んに産地周辺の転石を巧みに利用して石の槍先が作られるようになりま

ながら形を作っていくので、原石の大きさ以上の石器を作ることはできません。より大きな石器を作るためにはより大きな原石を獲得することが必要だったわけです。下茂内遺跡には五〇センチにもなる巨大な接合資料があります。

◆下茂内・神子柴・唐沢B

冒頭の二遺跡と下茂内遺跡との共通点は石槍を出土する遺跡だということです。神子柴遺跡は長大優美な石槍と巨大な石斧が多数発見された国内初の遺跡で、その後日本各地で同様な組み合わせをもつ遺跡が発見されました。「神子柴文化」ともよばれ、先土器時代終末期の研究上重要な石器群で、唐沢B遺跡も同様な石器群です。ところが、この神子柴遺跡も唐沢B遺跡も槍や斧といった道具の完成品ばかりが発見され、石器製作の痕跡は認められません。完成された石槍はほとんどなく製作時の石くずが大量に発見される下茂内遺跡との大きな違いです。生産に重きがある下茂内遺跡と消費・生活もしくは祭祀的な様相をもつ神子柴・唐沢B遺跡は対照的な遺跡といえます。下茂内遺跡から石器とともに出土した炭化物の年代を測定したところ、一万六千年前頃という数字がでました。神子柴・唐沢Bの両遺跡もほぼ同時期かやや新しいと考えられます。下茂内遺跡と神子柴・唐沢B遺跡の関係をさらに検討すれば、先土器時代における、石槍の生産と消費・流通のあり方が明らかになっていくと思われま

研究の窓

なぞの彗星と夜空への関心

四月二八日「謎の彗星、五月一二日、地球に大接近 GWがみごろに」という記事が新聞に掲載されました。それによると「シュワスマン・ワハマン第3彗星」と名づけられているその彗星は、過去に四九年間も行方不明になり「なぞの彗星」ともよばれました。この彗星の観測会は、五月の連休中に各地で行われ、夜空への関心を高めました。

今を生きる私たちだけではなく、過去の人も夜空に現れる彗星や流星に興味を持ち、その記録を残しています。そのような一人に一八世紀前半を生きた雲雀沢村（阿南町）の庄屋伊藤治左衛門がいました。

◆元文二年の彗星

治左衛門の日記に彗星の記録が初めてあらわれるのは元文二年（一七三七）正月（以下の日付は全て旧暦）です。治左衛門の記録では、彗星は一月四日に現れ、一月二八日を最後に見えなくなりました。正月のうちには宵の明星のように見えたと言っているのが、かなり明るい彗星であったことがうかがえます。また彗星の出現は、治左衛門が観察するよりも早く人びとの間で話題になっていました。突

然夜空に現れた彗星は、村人の関心事でもあったことがわかります。

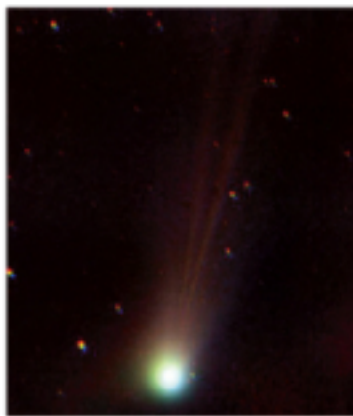
この彗星は、ブラッドレー彗星（C/1737C1）と名づけられた彗星で日本各地でも観察されました。治左衛門は、一月四日に村人が初めて彗星を見たことと記録しています。「近世日本天文史料」にもこの彗星に関する史料が収録されています。一月四日の記録は、同書に収録されているとの記録より早い段階のもので、彼の記録をもう少し検討しなければなりません。現在のところブラッドレー彗星出現の日本で一番古い記録の可能性がります。

◆寛保年間の彗星

治左衛門は、寛保年間（一七四一～四三）に二つの彗星の記録を残しています。一つめは、寛保二年の正月に出現した一七四二年第一彗星（C/1742C1）です。この彗星も治左衛門より早く人びとの話題に上っていました。治左衛門は、尾の長さが五、六尺（角度にすると三〇〇度程）であると観察しています。

二つめの彗星（クリンケンバーグ彗星 C/1743X1）は、寛保三年の一月から翌年の一月まで現れました。こ

の彗星に関して治左衛門は、数回記録を残しています。それによると一二月には、コマ（彗星の核）は西方にあり、南南西の方向に二間ほど（一二〇度程か？）の尾のびていました。その後いったん消えた彗星は次に東方に現れ、尾は南西の方向にのびていたと記録されています。治左衛門は、この彗星を断続的に三ヶ月に渡って観察しているだけではなく、再び現れた彗星を前に見たものと同じものであるとして



「リニア彗星」
東京大学木曾観測所撮影

いるなど科学的な目を持って観察しています。

◆天文学、そしてモノづくりへ

伊藤治左衛門が記録した二つの彗星について紹介しました。彗星の記録は「熊谷家傳記」や東福寺村（長野市）の荒川九郎の日記などさまざまな人びとによって残されています。また、天文現象に関わる記録も彗星にとどまらず、日食・月食などさまざまなものが残されています。その関心は、やがて天文学へ広がっていきまし

た。

本草学を学んだ飯田町の市岡智寛・曉智父子は、「天学摘要」を写したり、天文学に関して学んだことを「天文圖書」として残したりするばかりではなく、実際に月を観察した絵を残しています。市岡父子の天文学への関心は座光寺村の北原民右衛門に影響を与え、北原は天空の模型の一つである簡天儀を作っています。

現在当館で整理を進めている大町市の清水家文書の中には、天明四年（一七八四）の日食の計算をおこなったものの写が残されています。また、高遠藩士の岩崎博秋も天文学に興味を持ち、彗星や星の絵ばかりではなく、「天文曆学控」という天保一〇年（一八三九）から明治一五年（一八八二）に至る四四年間の観察記録を残しています（小野和英「近世信濃における天文学序説」当館研究紀要第七号）。

このような興味関心は、草の根の科学技術の発展やモノ作りにもつながるものでした。ある意味それは、科学技術立国日本の源流に位置づけられるものです。江戸時代の人びとが残した記録の中には、今の私たちの暮らしにつながるものがあります。そのような記録をたんねんに追いついていくことも歴史を研究する上で重要なことです。

（前澤 健）

「内国事務諸達留」東京大学史料編纂所蔵
「年貢半減令」を掲げ、信州に御一新を告げた先鋒嚮導隊は偽官軍として処刑されました。本史料は、新政府が政策転換をして「年貢半減令」取り消す意図が、朱書きされた訂正箇所から鮮やかに読み取れます。

■行事アルバム

【4月8日 長野県の遺跡発掘 2006 講演会】



京都大学名誉教授田中二郎氏により「アフリカ大陸の狩猟採集民」と題した講演会が開かれました。氏にはアフリカのブッシュマンと一緒に長期に暮らし、狩猟生活を体験した貴重な経験を中心にお話いただきました。

【6月4日 春季展講演会】



春季展「古瓦からみた信濃の古代」に関連して上田市信濃国分寺資料館館長倉澤正幸氏より「信濃の古代瓦」と題した講演をいただき、その後企画展の解説をしていただきました。

■編集後記

夏季企画展では、信州を舞台におこった幕末ドラマにスポットをあてました。ぜひご来館ください。

長野県立歴史館たより 夏号 vol.47

2006年6月23日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市雁代清水 科野の里歴史公園内
電話 026-274-2000 (代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.jp
ホームページ http://www.npmh.net

印刷 奥山印刷工業株式会社

■ 2006年

7月～10月の行事予定

7月

休館日
3・10
18・24
31

企画展

夏季企画展
幕末の信州
一時代を駆けた
草莽たちー
7/22～8/27
7/23 企画展講座①
「安政の大獄と信州の志士」
7/30 講演会①
「国学思想と信州の幕末維新」
講師：上條宏之氏
(長野県短期大学学長)
8/6 企画展講座②
「文久3年、尊王攘夷デモと信州」
8/20 講演会②
「偽官軍と信州の御一新」
講師：中島 明氏
(元群馬県史編纂
専門委員)

展示解説
7/23・8/6・8/13・8/27
先鋒嚮導隊ゆかりの地をめぐる
9/24

8月

休館日
7・21
28

9月

休館日
4～11
19・25

企画展

9/4～11
くん蒸期間中休館
常設展示替え
条里と水田

10月

休館日
2・10
16・23
30

企画展

秋季企画展
戦時下の
子どもたち
一信州の十五年戦争ー
9/30～11/12
10/8 講演会①
「母・藤原ていの戦争体験を語りつぐ」(仮題)
講師：藤原咲子氏
10/15 調査報告会
「長野県内の戦争遺跡」
10/29 講演会②
「戦時体制と学童疎開」(仮題)
講師：荒 敬氏
(長野県短期大学教授)
お話し会
10/21・11/4・11/11
展示解説
10/1・10/22・11/12
11/5 親子映画会

講座

7/1 長野県立歴史館
飯山公開講座
古文書講座
7/15 初級・上級(第3回)
7/16 中級(第3回)
考古学講座
7/29 卑弥呼の時代と千曲
川流域(第3回)

常設展示替え

庶民の旅
おさま
戦時下の農民の暮らし

夏休み特別企画

勾玉づくりに挑戦しよう！
7/22～8/27(休館日を除く毎日)
10:00～15:00
材料費 100円

常設展示替え

大塔合戦から川中島合戦へ

講座

古文書講座
9/16 初級・上級(第4回)
9/17 中級(第4回)
考古学講座
9/23 考古資料からみた古
代の文化領域(第4回)

講座

10/7 長野県立歴史館
上田公開講座
古文書講座
10/21 初級・上級(第5回)
10/22 中級(第5回)
考古学講座
10/15 遺跡探訪会(第5回)

常設展示替え

二つの縄文文化
祭りと墓
馬と科野の武人
古代の文字と印の世界
村の信仰
須田満綱の生涯
善光寺参り
長野県の誕生
信州の白樺派
世界につながる壺系業
第二次大戦後の復興